

感想

寄宿舎の楠の木

ビ―ビ―

昨日一寸本校の寄宿舎に参りましたが、手入の届いた各寮の庭園には、大分夏向の花が咲いて居ました。生徒の昇降口を上ると表廊下の窓越しに、すぐ目に入るのは、「月の一」の前の三株の君が代蘭です、タコの木に似た大きな葉の叢生した中から高く抜き出た一と莖に、フロックスの花序の様に、雪白の数々の花が、上へ上へと鈴なりに咲きのぼつて居るのは慥かに一掬の涼味でせう。醫局と「花の二」の間に密生したシダ類が、雨に濡れた光澤やかな青で、黒い土を色彩で居るのは、竹の寮の窓の下に、荻の若芽がのび揃つて、細かい葉すれを、ふと立止つた心の底に残して呉れるのと共に快よいもの、一として、「私も見入居るのです」と、うなづいて下さる人が多いと思ひます。梅の寮の紫陽花の淡紫は、狭竹

桃の猖紅と、「夏」の二た面を面白くシンボルして居るので誰の目をも惹いて居るに違ひありません。「梅の二」の窓の下に四五輪咲き残つた青莪の花をさへ、「初夏の風の色」として、なほ瞳を向けてゐる方もあるとききました。わざわざ裏廊下を廻り道して病室の前の廊下から、寧ろ黒ずんだイボタの梢が、南天の花ソツクリな、白い細かい一とかたまりの花を持つて居るのに見入つてゐる方もありました。けれ共誰か、寄宿舎に一本の楠の木のある事を知つて居る方があつたやうか、月の寮と花の寮との間の裏廊下の外窓の一つを蔽ふばかりに繁つた柔かい楠の梢が、風に光つて居るのを見出た方があつたやうか、私は寄宿舎の夏を色彩する如上の花に加へて、此の木の梢を皆さんにすゝめると共に、此に植ゑられた此の木に就いてもう少し話したいと思ひます。今から七年前私か本校の二年生の夏でした、休み中に徒然草を讀むで来るやうに宿題か出ましたので、ついでにそこに出で来る草木を集めて「文科の花壇」を作つてはと、級で話が締りました。で九月の歸校の時に私は裏の倉の傍にある、一本の楠の若木

を、新聞紙に包むで貰つて、赤帽の手にも渡さず、ハルト大和の五條から、後生大事に持つて來たのでしたが、先きの計劃は私一人の實行者では遂げられず、「折角持つて來たものを」と多少の不満を一人吐きながら、翌夕、風呂番の「依田」に手傳つて貰つて、此所の空地に植ゑたのが此の木です。

その頃のこの空地は一面の雑草で、洗濯場への廊下の窓下に、五尺ばかりの高さからみ付いた、イタビカヅラと、すぐ右傍へ一尺程離れて幹の細い枝ぶりの貧しい三尺許りの乙女椿がありました、花の寮に近い隅には、之も枝振りの貧しいツツジが二三本ありましたが、幼稚園の藤の花が、賑やかに咲き出しますと、此の木にも小さい赤い花を、まばらに付けて、春夏のゆきかひを、殊勝にも見せるのでしたが、それに續いてそのあたりの雑草に交つた、ひるがほが、あるか無きかの色をして、三つ四つ許りの花を、ソツと咲かせて居りました、たつたこれだけの草木しか持たぬ此所の空地は、其の上三方は建物に一方は、柏の植込みに遮られて、陽の目の乏しい隠濕な所でありました、寄宿舎

の庭といふ庭のどの庭よりも、暗い食しい、手入の届かぬ「營養不良な庭だ」と私は敢へて申します。

私の楠の木は此所の椿の右前に植ゑられたので、それは恰度夕食後でした、無口な「依田」は、「此所のあたりが良いでせう」と、私から示された場所をポツリポツリと掘り出しました、其の間に私は洗濯場の手桶に水を一杯汲で來ました、依田の鍬が動く度に立つ、黒い土の隠濕な強い嗅ひと、草叢の中に置かれた私の楠の白い紙包みとが、さすがにあたりを賑はして居りました。「如何なもので御座いますか」と依田は鍬を杖つきました、穴は前に一尺の深さを見せ居ります。私は黙つて紙包みを解いて五日ぶりに楠の木の根を外に出しました。一と圍りの赤味がかつた土が稍々ぼろ／＼になつて、幾重にも藁で巻かれてゐたのを、ぐる／＼とほごして行く時、立つ朝、兄が裏の井戸傍で、荷造つて呉れて居た手つきがハッキリと見えるのでした、楠の木は「日當りの好い、そして乾いた土を好む」ことを經驗の上で熟知して居た私は、此の目の前の穴を見て、「育つたらふ



か」と氣遣ひはしたが、それでも、枯してはと、穴の底を水でうるほし、根に土をかけて確り押へた後からもたつぷり水をかけてやりました、私は「大丈夫でせうね」と依田の顔を見上げると依田は「へい」と目尻に著しいしわを寄せて、鍬の柄の上に載せてゐた一方の手で、ソツと額を撫でました、默學の鐘が鳴りましたので、私は手桶を依田は鍬を各自に持つて立ち上りました、柏の木の下でふり返つた時、椿の丈の半分も無い私の楠の木は、あたりの雑草に半ば隠れて、庭は別に賑かになつた様でもありませんだ。

「今日」こそ附屬の女學校の花壇に、大小の楠の苗木が數十株も植ゑ付けられて、雨の翌日などは、際立つた二筋の側脈を持つた緑の浅い葉か、つや／＼と風に戦いだ、此の木のテンダーさを見られますが、此の頃は校内で、高さ一尺許りな、小指程の太さの幹と、左右に張つた二本の小枝に二三拾枚の葉を持つて、シヨンポリと立つた、私の此の楠の木が、關東以北の人達をして「千枝に分かれて物をこそ思へ」とよまれた、住吉社頭に鬱然と參天してゐる此の木の雄姿や、峰に谷に谷に峰に千年の影を造つてゐる臺

ちました、二丈の緑を、五寸の幹に悠りと支へた私の楠の木は、花寮側の窓から望むと、椿もイタビカヅラもすつかり影に入れて仕舞ひますし、洗濯場側の窓から見ると、勿論ツツジを隠して仕舞ふた上にイタビカヅラの三倍にも育つて居るのがわかりました。そして此の日の新しい發見は、更に二本の木が此の庭に増して居た事です。それはポブラの葉の形をして、表は濃く裏は白くてそこに眞白な柔かい細毛を持つた、ピロードの手觸りのする葉を付けたギンドロの木でありました。初夏の風に連れて其の鮮かな葉の表裏から生れる聲のさわやかさと、圓みのある大きな圓錐形の木の輪廓が蒼い空に高くくつきりと描かれた快よさは、夏の北海道で落葉松やポブラと並べ稱すべきものでありました。そのギントロが、この時我が楠の木の傍に肩を並べて二本迄も立つてゐたのです、私はヂツとその木に見入りました、二本とも小枝は殆ど切り拂はれて、あの鮮かな葉は稀でした、近くの方のは、徑三寸程の幹が地上から三尺はかりの所で、ゲクと、くの字形に曲つて、帽子を被らぬ人の様に、頂きがポツリと寂しく切られてあ

灣の深林を想望せしむるには、唯つた一本であつたのです。日向の國に育つた或る詩人が『私はいつも山の時に立つて、五尺の高さに梢を揃へた此の若木の苗が緩い山原のスロープに「軽いひゞきと明るさ」をみせて戦いて居るのを「時」を忘れて見て居たものです』と話されたのをきいて、私は思はず此の方の御歌のあの「薄ら冷い明るさ」は、慙うしていつのまにか育つたのだと心の底からうなづきました、私はその軽い明るさを、唯た一本の此所此の木で想ふて居たのでした、そしてよく水を呉れたり、杖を持たせたり、草をひいたりして不思議にも倒面を厭ひませんだ。

それから全四年の後、私は地方から歸つて來ました、生徒監の先生方に御挨拶が終ると、何よりも先、此の庭の前の廊下に立つて、硝子戸越しに透しみました、イタビカヅラとツツジの間に挺然として一丈の翠蓋をかざして居るのが、あの私の楠の木でした、「寄宿舎の楠の木いたく丈のびぬ北海道にて何してありけむ」は駄作ながらも私の好きな歌です。それから又二年経つた今日、私は二度此の木の前に立

りました、向ふの少し細く小さいのは、稍、シヤンとした姿勢ではあるが、先のと同じく葉と小枝が薄いので、轟々しいよりも寧ろ寒さうでありました、そして是等は我が楠の木の對向者であるよりもその背景の一部となつて、其の悠久の風姿をより完く見せるために大事な味方でありました、椿もツツジもひるがほも花期を終つた此の頃の此の庭には、唯つた一本の此の楠の木のみが、深い緑のかげを投げて、此等の庭木の盟主をなして居ります。他の庭の夫々の花にも劣らず夏の姿をみせて居ります、さても植ゑた木が年と共にかくスク／＼と育つて行くのに、何の不思議があるでせう、校内幾十本の木は、皆生々日に新なる營みにあるのです、にもかゝはらず、何といふ狭いくだらぬ私の如上の執着でせう、けれども我が私他の木にまさつて此の木の發育が氣遣はれ喜ばれるのを一面の事實だときいて下さい、そして私は此の心を移して、我が文科會誌が、明治四十四年十一月の初號「編輯のあの時」から、今や第十五號に迄育つて來たのを、心から喜んで居る一人です。

(六月十九日)